

2022年度 第2回 対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類 長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2023年4月～9月)のポイント

海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域は、短期的な南北移動を繰り返すが、「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」もしくは「接岸傾向」で経過する。
- (2) 東シナ海から九州（山口県・沖縄県を含む）沿岸域にかけての表層水温は、全般的に「平年並み～やや高め」で経過する。

※引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。

「やや」：約3年に1回程度の発生頻度

「平年並み」：約2年に1回程度の発生頻度

漁況（来遊水準）

- (1) マアジ：東シナ海は沖合域で前年・平年並み、沿岸域は前年並みで、平年を上回る。
日本海は前年並みで、平年を下回る。
- (2) マサバ：東シナ海は沖合域、沿岸域とも前年・平年並み。日本海は前年を下回り、平年並み。
- (3) ゴマサバ：東シナ海は沖合域で前年並みで、平年を下回る。沿岸域は前年・平年を下回る。
- (4) マイワシ：東シナ海は前年・平年を上回る。日本海は前年・平年を上回る。
- (5) ウルメイワシ：東シナ海は前年・平年並み。
- (6) カタクチイワシ：東シナ海は前年・平年を下回る。

※「前年」は2022年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。

※東シナ海の予報対象は上記の全6種、日本海の予報対象はマアジ、マサバ、マイワシ。

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当：企画調整部門（横浜） 上原

漁況：浮魚資源部（長崎）大下、黒田

海況：海洋環境部（長崎）渡邊、種子田、井桁

電話：095-860-1600（長崎）、ファックス：095-850-7677（長崎）

当資料のホームページ掲載先URL

<https://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/>

予報対象海域

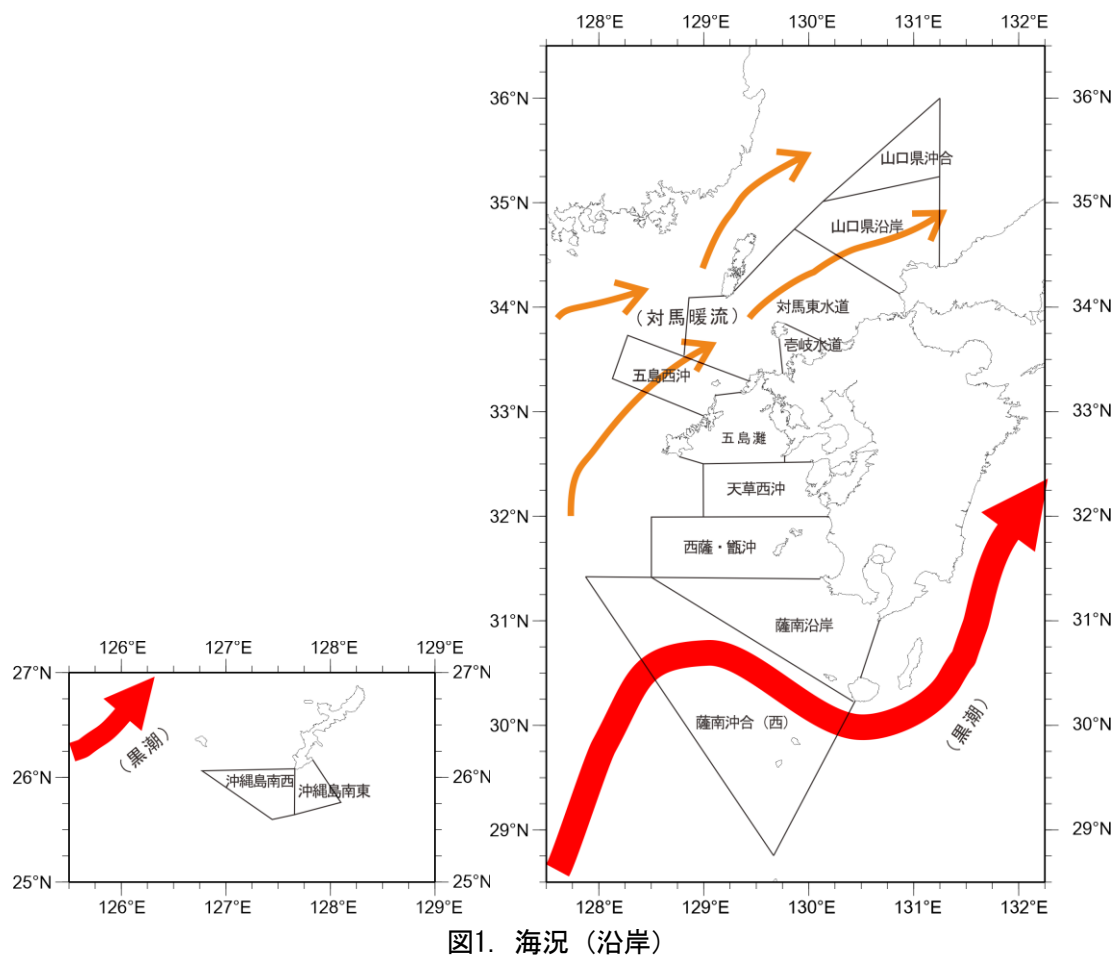


図1. 海況（沿岸）

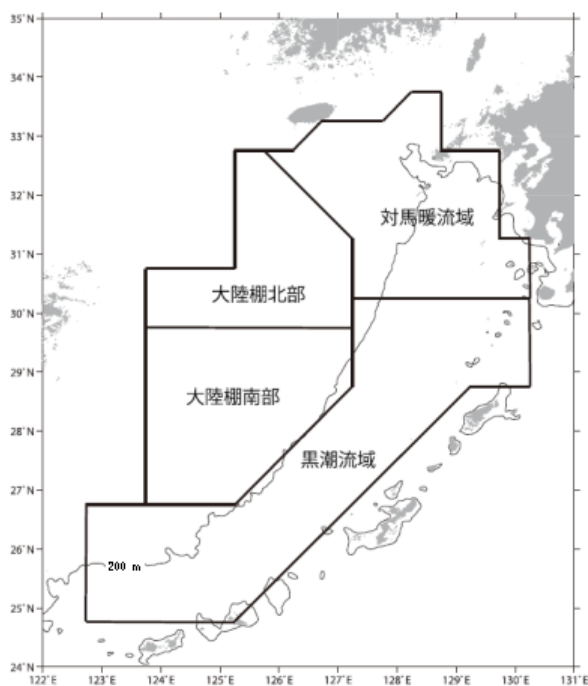


図2. 海況（沖合）

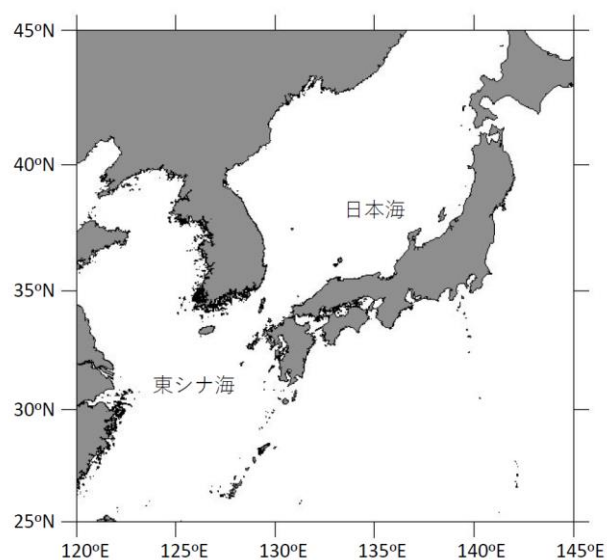


図3. 漁況。東シナ海：鹿児島県から山口県までの沿岸とその沖合を含む海域。日本海：島根県から青森県までの沿岸とその沖合を含む海域（陸奥湾を含む）

西海ブロック海況予報

1. 今後の見通し（2023年4月～9月）

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、短期的な南北移動を繰り返すが、「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」もしくは「接岸傾向」で経過する。

(2) 表層水温

山口県沿岸・沖合、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甑沖、薩南沿岸、薩南沖合、大陸棚上、黒潮流域は「平年並み～やや高め」、沖縄島周辺海域は「平年並み」で経過する。

2. 経過（2022年10月～2023年3月）

1. 大陸棚上

(1) 海面水温

北部：10・11月「平年並み」、12月「やや高め」、1・2月「平年並み」。

南部：10・11月「平年並み」、12月「かなり高め」、1・2月「平年並み」。

2. 黒潮流域

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、10月は「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」、11月は「接岸傾向」、12月は「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」、1・2月は「接岸傾向」で経過。

(2) 海面水温

10・11月「やや高め」、12月「かなり高め」、1・2月「平年並み」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1) 表層水温

山口県沖合：10月「かなり高め」、11月～1月「やや高め」、2月「かなり低め」、3月「はなはだ高め」。

山口県沿岸：10月「やや高め」、11月「平年並み」、12月「やや高め」、1・2月「平年並み」、3月「かなり高め」。

対馬東水道：10月「やや高め」、11月「平年並み」、12月「やや高め」、1・2月「平年並み」、3月「かなり高め」。

壱岐水道：10・11月「平年並み」、12月「かなり高め」、1月「平年並み」、2月「やや高め」、3月「はなはだ高め」。

五島西沖：11・2月「平年並み」、3月「かなり高め」。

五島灘：10・11月「平年並み」、2・3月「やや高め」。

天草西沖：10・11月「平年並み」、1月「はなはだ高め」、3月「やや高め」。

西薩・甑沖：11月「平年並み」、1月「はなはだ高め」、3月「やや高め」。

薩南沿岸：11月「やや高め」、1月「かなり高め」、3月「やや高め」。

薩南沖合：11・1・3月「平年並み」。

沖縄島南東：10月「かなり高め」、11・3月「やや高め」。

沖縄島南西：10月「かなり高め」、11月「平年並み」、3月「やや高め」。

(2) 表層塩分

山口県沖合：10月～12月「平年並み」、1月「やや低め」、2月「かなり低め」、3月「やや低め」。

山口県沿岸：10月「平年並み」、11月「やや低め」、12月「平年並み」、1月～3月「やや低め」。

対馬東水道：10月「平年並み」、11月「やや低め」、12月「平年並み」、1月「やや低め」、2月「かなり低め」、3月「やや低め」。

壱岐水道：10・11月「やや低め」、12月「かなり低め」、1月「平年並み」、2月「やや低め」、3月「はなはだ低め」。

五島西沖：11・2月「やや低め」、3月「かなり低め」。

五島灘 : 10月「やや低め」、11月「かなり低め」、2月「平年並み」、3月「やや低め」。
天草西沖 : 10月「平年並み」、11月「はなはだ低め」、1・3月「やや低め」。
西薩・甕沖 : 11月「はなはだ低め」、1月「やや低め」、3月「かなり低め」。
薩南沿岸 : 11月「平年並み」、1・3月「やや低め」。
薩南沖合 : 11・1・3月「やや低め」。
沖縄島南東 : 10月「平年並み」、11月「やや低め」、3月「かなり低め」。
沖縄島南西 : 10月「かなり低め」、11・3月「やや低め」。

3. 現況（2023年3月中旬）

（1）大陸棚上

海面水温は北部「やや高め」、南部「やや高め」。

（2）黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「接岸傾向」。海面水温は「平年並み」。

（3）対馬暖流域

海面水温は「はなはだ高め」。

（注）引用符「」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」 : 約22年に1回程度の発生頻度
「かなり」 : 約7年に1回程度の発生頻度
「やや」 : 約3年に1回程度の発生頻度
「平年並み」 : 約2年に1回程度の発生頻度

マアジ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2023年4月～9月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2023年級群（2023年生まれ））、1歳魚（2022年級群）、2歳魚（2021年級群）。

魚の大きさは尾叉長で表示。

1. 東シナ海

(1) 来遊量：沖合域は前年・平年並み、沿岸域は前年並みで、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、東シナ海中・南部、対馬沖、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：15～25cmの1歳魚（ゼンゴ・小・中銘柄）が主に、5～15cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と25cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

2. 日本海

(1) 来遊量：前年並みで、平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、日本海西部が漁場となる。

(3) 魚体：15～22cmの1歳魚（ゼンゴ・小銘柄）が主に、5～15cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と22cm以上の2歳魚以上（小・中・大銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2022年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2022年11月～2023年1月）および見通し（2023年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準だったが、1980・1990年代前半に増加し、1993年～1998年には50万トンを超えた。その後、資源量は減少し、1999年～2002年には30万～40万トンだったが、2003年、2004年には増加し、再び50万トンを超えた。2005年から2012年にかけてゆるやかに減少し、2012年は34万トンだった。2013年～2020年は35万～42万トンで推移し、2021年の資源量は39万トンであった。

東シナ海・日本海での我が国のマアジの漁獲量は、1973年～1976年には9万～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980・1990年代は増加傾向を示し、1993年～1998年には20万トンを超えたが、1999年～2002年は14万～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであった。2005年～2017年は11万～14万トンであったが、2018年以降は10万トンを下回った。

2. 漁況の経過

(1) 東シナ海

2022年11月～2023年1月の大中型まき網漁業のマアジの主な漁場は、対馬沖であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業の漁獲量は2千トンで前年（2021年11月～2022年1月、4千トン）・平年（4千トン）を下回った。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を上回った（表1）。漁獲の主体は17～25cmの1歳魚（2021年級群）と17cm以下の0歳魚（2022年級群）であった。

(2) 日本海

島根県～青森県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年並みであった（表2）。漁獲の主体は17～22cmの1歳魚（2021年級群）、17cm以下の0歳魚（2022年級群）であった。

3. 今後の見通し

資源評価や直近の漁況より、2021年級群の豊度は2020年級群並みとみられる。調査船調査の結果からは2022年級群の豊度は2021年級群を上回るとみられるが、直近の漁況では沖合域の漁獲が低調に推移していることから、前年並みにとどまる可能性もある。2023年級群の豊度の評価は難しいが、海洋環境等から判断すると2022年級群並みとみられる。

(1) 東シナ海

例年、4月～9月期には1歳魚（ゼンゴ銘柄）と2歳魚（小・中銘柄）が漁獲の主体で、3歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。前年の漁況は沖合域、沿岸域ともに平年並みであった。漁獲の主体となる1歳魚と2歳魚の豊度は前年並みとみられることから、沖合域の来遊量は前年・平年並みと考えられる。沿岸域では、直近の漁況から判断すると、1歳魚を主体に平年を上回る来遊があるとみられる。このため、沿岸域の来遊量は前年並みで、平年を上回ると考えられる。

(2) 日本海

例年、4月～9月期には1歳魚（ゼンゴ銘柄）が漁獲の主体で、後半には0歳魚（豆銘柄）が主に漁獲される。前年の漁況は平年並みであったものの、低調だった。漁獲の主体となる1歳魚の豊度は前年並みで、0歳魚の年級豊度は前年並みとみられることから、来遊量は低調だった前年並みで平年を下回ると考えられる。

マサバ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2023年4月～9月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2023年級群（2023年生まれ））、1歳魚（2022年級群）、2歳魚（2021年級群）。

魚の大きさは尾叉長で表示。

1. 東シナ海

(1) 来遊量：沖合域、沿岸域とも前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、東シナ海中・南部、五島西、対馬沖、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は26～32cmの1歳魚（豆・小銘柄）と33～35cmの2歳魚（小銘柄）が、漁期後半は1・2歳魚に加えて、25cm以下の0歳魚（豆銘柄）が主に漁獲される。

2. 日本海

(1) 来遊量：前年を下回り、平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、日本海西部～中部が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は26～32cmの1歳魚（豆・小銘柄）と33cm以上の2歳魚以上（小・中銘柄）が、漁期後半は1・2歳魚に加えて、25cm以下の0歳魚（豆銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2022年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2022年11月～2023年1月）および見通し（2023年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970年代から1990年代半ばまで、一時的に60万～70万トン台に低下した年はあるものの、100万トン前後で推移し比較的安定していた。しかし、2000年以降、50万トン前後に留まっている。2013年には1973年以降で過去最低の38万トンとなったが、2014年以降、高い加入量に支えられ、資源量は60万トン前後まで増加した。2019年・2020年は加入量が減少したが、2021年は回復し、2021年の資源量は53万トンと推定されている。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は、1970年代後半は30万トン前後であったが、1990年代初めに15万トンほどに落ち込んだ。その後、1996年に41万トンまで増加したが、2000年以降、概ね8万～12万トンの低い水準で推移している。近年の漁獲量は、2019年以降、8万～10万トンの水準である。

2. 漁況の経過

(1) 東シナ海

2022年11月～2023年1月の大中型まき網漁業のマサバの主な漁場は対馬沖であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業のさば類の漁獲量は1万8千トンで前年（1万8千トン）、平年（1万6千トン）並みであった。九州主要港の相場情報に基づくマサバの漁獲量は前年並みで、平年を下回った。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を上回った（表1）。漁獲の主体は18～27cmの0歳魚（2022年級群）と28～35cmの1・2歳魚（2020・2021年級群）であった。

ただし、大中型まき網漁業や長崎県の沿岸漁業等では、TACによる制約のため、マサバの漁獲を自粛した期間があった。

(2) 日本海

島根県～青森県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を上回った（表2）。漁獲の主体は20～27cmの0歳魚（2022年級群）と28cm以上の1歳魚（2021年級群）以上であった。ただし、大中型まき網漁業では、TACによる制約のため、マサバの漁獲を自粛した期間があった。

3. 今後の見通し

2021年までの情報に基づく今年度の資源評価結果から判断すると、2021年級群の豊度は少なかった2020年級群を上回るとみられる。2022年秋以降の豆銘柄の漁況から判断すると、2022年級群の豊度は2021年級群並みとみられる。2023年級群の豊度の評価は難しいが、資源評価における将来予測結果から判断すると、2022年級群並みとみられる。0～2歳魚が漁獲の主体であることから、系群全体の豊度は前年並みと考えられる。

(1) 東シナ海

例年、4月～9月期はマサバの盛漁期にあたらないものの、安定した漁獲がある。前年の漁況は沖合域、沿岸域ともに平年並みであった。沖合域、沿岸域とも、前半は1・2歳魚（豆・小銘柄）が漁獲の主体で、後半には0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。漁獲の主体となる0歳魚と1歳魚の年級豊度が前年並みとみられることや2022年秋以降の安定した漁況から判断して、沖合域、沿岸域とも来遊量は前年・平年並みと考えられる。

(2) 日本海

例年、4月～9月期はマサバの盛漁期にあたらないため、漁獲は低調に推移すると考えられるが、前年のように平年を大きく上回る年もある。沖合域、沿岸域とも、前半は1歳魚以上（豆～中銘柄）が漁獲の主体で、後半には0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。漁獲の主体となる0歳魚と1歳魚の年級豊度が前年並みであるが、来遊量は特異的に好漁だった前年を下回り、平年並みと考えられる。

ゴマサバ東シナ海系群の漁況予報

今後の見通し（2023年4月～9月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2023年級群（2023年生まれ））、1歳魚（2022年級群）、2歳魚（2021年級群）、3歳魚（2020年級群）。魚の大きさは尾叉長で表示。

(1) 来遊量：沖合域は前年並みで、平年を下回る、沿岸域は前年・平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、東シナ海中・南部、五島灘・薩南、鹿児島県の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：沖合域では15～28cmの0歳魚（豆銘柄）および28～32cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。沿岸域では25～37cmの1歳魚以上（豆～中銘柄）が漁獲される。

注：「前年」は2022年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2022年11月～2023年1月）および見通し（2023年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海から日本海西部に生息するゴマサバの資源量は、1992年以降、10万～20万トン程度で推移し比較的安定していた。近年は、2015年以降増加傾向を示し、2018年には21万トンに達したが、2019年に急減し、2021年は13万トンであった。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1970年代以降5万トン前後で推移している。近年では2011年の4万9千トン进行ピークに減少傾向にあり、2018年にやや増加したものの、2019年以降減少し、2021年は2万4千トンであった。

2. 漁況の経過

2022年11月～2023年1月の大中型まき網漁業のゴマサバの主な漁場は、東シナ海中部と五島灘・薩南、対馬沖であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業のさば類の漁獲量は1万8千トンで、前年（1万8千トン）、平年（1万6千トン）並みであった。九州主要港の相場情報に基づくゴマサバの漁獲量は前年並みで、平年を上回った。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を下回った（表1）。20～35cmの0歳魚（2022年級群）以上が漁獲された。

3. 今後の見通し

資源評価結果やこれまでの漁況から判断すると、2021年級群の豊度は2020年級群並み、2022年級群の豊度は2021年級群並みとみられる。2023年級群の評価は難しいが、資源評価における2022年の親魚量は微増と予測されるため、2022年級群並みと考えられる。

例年、4月～9月期は沖合域では1・2歳魚（豆・小銘柄）が漁獲の主体で、0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。前年の漁況は低調であり、平年を下回った。漁獲量の大半を占める1歳魚の年級豊度が前年並みであり、直近の漁況を考慮すると、沖合域の来遊量は前年並みで、平年を下回ると考えられる。沿岸域では1歳魚以上（豆～中銘柄）が主に漁獲される。前年の漁況は平年並みであった。沿岸域の来遊量は、直近の漁況を考慮すると、前年・平年を下回ると考えられる。

マイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2023年4月～9月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、棒受網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2023年級群（2023年生まれ））、1歳魚（2022年級群）、2歳魚（2021年級群）、3歳魚（2020年級群）。魚の大きさは被鱗体長で表示。

1. 東シナ海

(1) 来遊量：前年・平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は主に15～19cmの1歳魚に2歳以上が混ざり（中・大羽銘柄）、後半は15cm以下の0歳魚（小・中羽銘柄）が主体に漁獲される。

2. 日本海

(1) 来遊量：前年・平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：漁期前半に日本海西部～中部、後半に日本海西部の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は16～22cmの1～3歳魚（小・中・大羽銘柄）主体に、後半は5～15cmの0歳魚（小・中羽銘柄）が主体に漁獲される。

注：「前年」は2022年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2022年11月～2023年1月）および見通し（2023年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は、1970年代に増加し、1980年代にかけて高い水準にあった。しかし、1990年代に急激に減少し、2001年～2003年には過去最低水準となった。その後、2004年～2012年にかけて増加に転じ、2013年以降横ばい傾向にあったが、2019年から再び増加に転じた。

東シナ海・日本海における我が国のマイワシの漁獲量は、1983年～1991年までは100万トン以上と多かった。その後、急激に減少し、2001年～2003年の漁獲量は1千トン程度で推移した。2004年から漁獲量は増加傾向となり、2011年に急激に増加して4万3千トンとなった。その後も増加傾向にあり、2021年は5万5千トンであった。

2. 漁況の経過

(1) 東シナ海

2022年11月～2023年1月の鹿児島県～山口県地先におけるマイワシの漁獲量は、前年を上回り、平年を下回った（表1）。海域別に見ると、長崎県・鹿児島県では前年を上回ったが、その他の県においては前年・平年を下回った。漁獲が少なく体長測定ができなかった。

(2) 日本海

2022年11月～2023年1月の島根県～青森県地先におけるマイワシの漁獲量は、前年・平年を下回った（表2）。漁獲の主体は10～23cmの0～3歳魚であった。

3. 今後の見通し

資源評価結果や直近の漁況より、2020年級群の豊度は2019年級群よりも大きく、2021年級群および2022年級群の豊度は2020年級群と同等とみられる。2023年級群の豊度の評価は難しいが、親魚の来遊状況と直近の漁況

から判断すると、2022年級並みか上回ると考えられる。

(1) 東シナ海

例年、4月～9月期の前半には1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）が主体に漁獲され、後半には0歳魚（小羽・中羽銘柄）が漁獲される。近年の漁況は、漁期後半における0歳魚の漁獲量に強く影響される傾向がある。東シナ海の漁期後半における漁況は当海域への親魚の来遊量に依存すると考えられ、直近の漁況から親魚の来遊量は過去20年間に於いて最も多いと考えられるため、東シナ海の来遊量は前年・平年を上回ると考えられる。

(2) 日本海

例年、4月～9月期の前半には1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）が主体に漁獲され、後半には0歳魚（小羽・中羽銘柄）が漁獲される。近年の漁況は、漁期前半における1歳魚以上の漁獲量に強く影響される傾向がある。年級群豊度を考慮すると、漁期前半における来遊量を構成する1～3歳魚（2020～2022年級群）の豊度は前年同期の1～3歳魚（2019～2021年級群）より大きいと考えられることから、日本海における来遊量は前年・平年を上回ると考えられる。ただし、この1～3歳魚が漁場に来遊する時期が早期化している可能性があり来遊の期間については不確実性が高いことから、漁獲量としては平年並みにとどまる可能性もある。

ウルメイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2023年4月～9月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、棒受網、その他

対象魚群：0歳魚（2023年級群（2023年生まれ））、1歳魚（2022年級群）、2歳魚（2021年級群）。
魚の大きさは被鱗体長で表示。

(1) 来遊量：前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：漁期の後半が漁獲の主体となる。長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は15cm以上の1・2歳魚（中羽・大羽銘柄）が、漁期後半は5～15cmの0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2022年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2022年11月～2023年1月）および見通し（2023年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海における資源量は1976年から1984年にかけて減少したのち、1990年代初めまで増加に転じた。1995年には資源量は10万トンを超えたが、その後再び減少し、2003年に2万5千トンとなった。2003年以降は変動しながら増加し、2015年には14万3千トンに達したが、その後減少して、2021年の資源量は9万4千トンとなった。

東シナ海・日本海での我が国の漁獲量は、1976年から1998年まで毎年2万トンを超える漁獲があった。特に1980年代後半から1990年代前半までは4万トンを上回る年が多くみられた。しかし、1990年代後半から2000年にかけて1万トンまで減少した。2001年以降は増加傾向にあり、2013年と2016年には5万トンを超える漁獲量となった。2017年以降の漁獲量は3万1千～3万9千トンの間で変動し、2020年は1万9千トンと大きく減少したが、2021年は3万4千トンと回復した。

2. 漁況の経過

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を下回った（表1）。2022年11月～2023年1月までの漁獲の主体は15～20cmの0歳魚（2022年級群）を主体に20cm以上の1・2歳魚（2021・2020年級群）も漁獲された。

3. 今後の見通し

例年、4月～9月期には1・2歳魚（中羽・大羽銘柄）が、後半に0歳魚（小羽・中羽銘柄）が漁獲の主体となる。2022年11月～2023年1月の漁況の経過から、2022年級群の豊度は2021年級群並みと考えられる。2023年級群の豊度を予測するのは困難であるが、直近の漁況から判断すると、2022年級群と同程度と考えられる。したがって、全体の来遊量は前年・平年並みと考えられる。

カタクチイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2023年4月～9月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、棒受網、その他

対象魚群：0歳魚（2023年級群（2023年生まれ））、1歳魚（2022年級群）。魚の大きさは被鱗体長で表示。

(1) 来遊量：前年・平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、山口県および長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は5cm以上の0・1歳魚（小羽・中羽・大羽銘柄）が主体で、漁期後半は4～8cmの0歳魚（カエリ・小羽銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2022年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2022年11月～2023年1月）および見通し（2023年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するカタクチイワシの資源量は、1995年以降増加傾向を示して1998年には42万6千トンに達したが、2001年～2005年には19万トン前後まで減少した。資源量は2007年には30万2千トンとなったが、その後減少し、2021年には過去最低の10万4千トンとなった。

東シナ海・日本海における我が国のカタクチイワシの漁獲量は、1997年を除いて1996年～2000年には10万トンを超えていたが、2004年には6万1千トンまで減少した。その後2005年～2008年には増加したが、2009年～2013年には減少し、2014年・2015年に増加して6万1千トンであった。2016年以降は減少傾向にあり、2021年には4万1千トンとなった。

2. 漁況の経過

鹿児島県～山口県地先における漁獲量は不漁であった前年並みで、平年を下回った（表1）。漁獲の主体は2022年11月～12月には3～7cmの0歳魚で、2023年1月には5～7cmの0歳魚であった。

3. 今後の見通し

例年、4月～9月期の前半は0・1歳魚（小羽・中羽・大羽銘柄）が、後半は0歳魚（カエリ・小羽銘柄）が主体に漁獲される。2022年5月～9月の漁況等から、2022年の春期発生群の豊度は2021年の春期発生群を下回ると考えられる。また2022年10月～2023年1月の漁況等から、2022年の秋期発生群の豊度は2021年の秋期発生群を下回ると考えられるため、1歳魚の豊度は前年を下回ると判断される。2023年の春季発生群の豊度を予測するのは困難であるが、2022年の春季発生群並みであると仮定すれば、全体の来遊量は前年・平年を下回ると考えられる。

表1. 東シナ海における沿岸域の漁況経過（2022年11月～2023年1月）

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
鹿児島	漁獲量は800トンで、前年・平年並みであった（前年比83%、平年比110%）。	枕崎港の中型まき網による漁獲量は31トンで、前年・平年を下回った（前年比18%、平年比4%）。	枕崎港の中型まき網による漁獲量は448トンで、前年・平年を下回った（前年比40%、平年比27%）。
熊本 牛深港	漁獲量は240トンで、前年・平年を上回った（前年比363%、平年比501%）。	漁獲量は1,103トンで、前年・平年を上回った（前年比321%、平年比240%）。	
長崎	地域により差があるが、前年・平年を上回った（前年比133%、平年比150%）。	地域により差があるが、前年・平年を上回った（前年比143%、平年比131%）。	
佐賀	漁獲量は62トンで、前年・平年を下回った（前年比38%、平年比48%）。	漁獲量は29トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比49%、平年比89%）。	
福岡	代表港中型まき網漁獲量は134トンで、前年・平年を上回った（前年比463%、平年比193%）。漁獲のうち、小銘柄が61%、中銘柄が26%であった。棒受網での漁獲はなかった。小型定置網の漁獲量は4トンで、前年・平年を下回った（前年比62%、平年比50%）。	代表港中型まき網漁獲量は13トンで、前年・平年を下回った（前年比33%、平年比30%）。漁獲のうち、マメ銘柄が主体であった。棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網漁獲量は125トンで、前年・平年を上回った（前年比5,712%、平年比348%）。
山口	中型まき網漁業の漁獲量は222トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比227%、平年比118%）。	中型まき網漁業の漁獲量は97トンで、前年・平年を下回った（前年比31%、平年比77%）。	

注：「前年」は2022年11月～2023年1月、「平年」は過去5年の平均値。

山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。

表1. 続き

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
鹿児島	主要4港のまき網による漁獲量は18トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比158%、平年比12%）。北薩海域における棒受網による漁獲量は0.2トンで、前年・平年を下回った（前年比4%、平年比1%）。	主要4港のまき網による漁獲量は350トンで、前年・平年を下回った（前年比58%、平年比38%）。北薩海域における棒受網による漁獲量は5トンで、前年・平年を下回った（前年比5%、平年比5%）。	主要4港のまき網による漁獲はなかった（前年258トン、平年90トン）。北薩海域における棒受網による漁獲量は4トンで、前年・平年を下回った（前年比18%、平年比10%）。
熊本 牛深港	漁獲量は6トンで、前年・平年を下回った（前年比26%、平年比20%）。	漁獲量は375トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比41%、平年比82%）。	漁獲量は36トンで、前年・平年を下回った（前年比22%、平年比16%）。
長崎	地域により差があるが、前年を上回り、平年を下回った（前年比5,556%、平年比14%）。	地域により差があるが、前年を上回り、平年を下回った（前年比182%、平年比73%）。	地域により差があるが、前年を上回り、平年を下回った（前年比241%、平年比60%）。
佐賀	漁獲量は0.03トンで、前年・平年を下回った（前年比4%、平年比2%）。	漁獲量は0.1トンで、前年・平年を下回った（前年比1%、平年比4%）。	漁獲量は2トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比297%、平年比9%）。
福岡	代表港中型まき網漁獲量は0.1トンで、漁獲のなかった前年を上回り、平年を下回った（平年比60%）。棒受網の漁獲はなかった。	代表港中型まき網漁獲量は2トンで、前年・平年を下回った（前年比7%、平年比28%）。棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網および棒受網での漁獲はなかった。
山口	中型まき網漁業、棒受網・すくい網漁業では漁獲されなかった。	湊地区の棒受網・すくい網漁業では漁獲されなかった。	湊地区の棒受網・すくい網漁業の漁獲量は小羽・中羽主体に235トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比1,120%、平年比94%）。

注：「前年」は2022年11月～2023年1月、「平年」は過去5年の平均値。

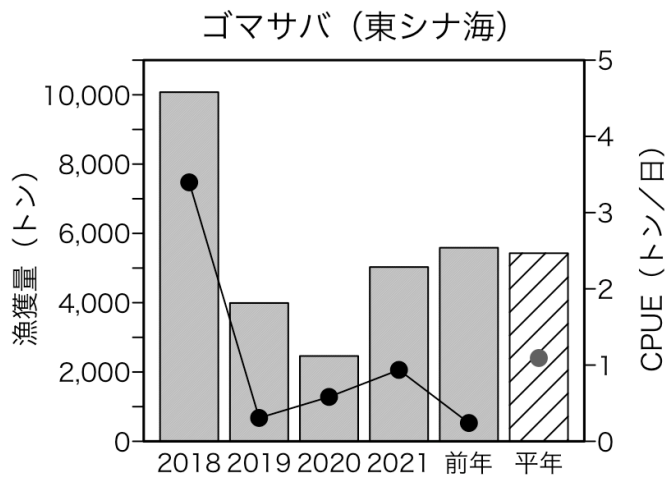
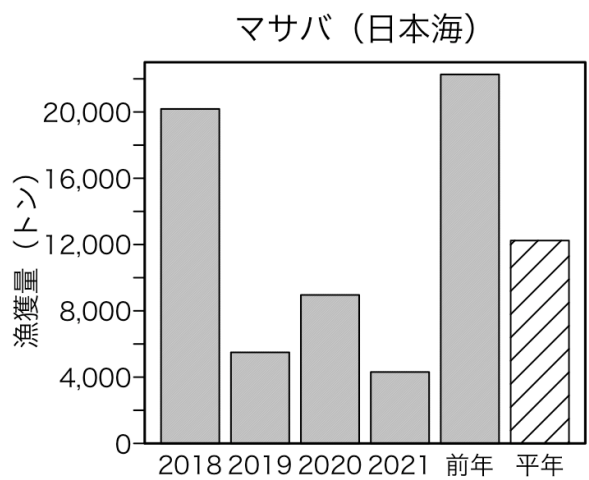
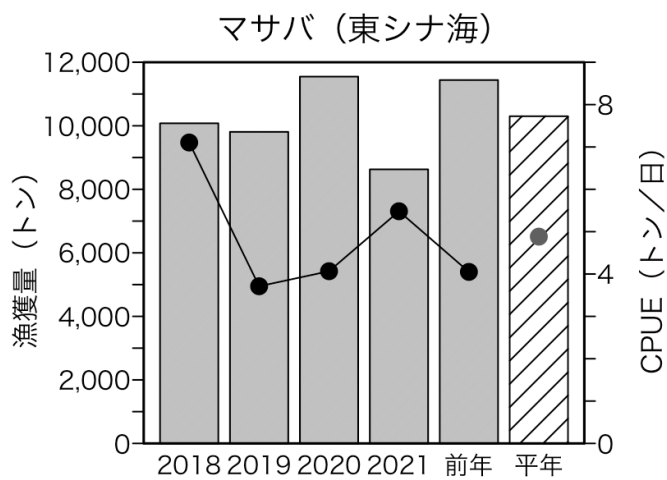
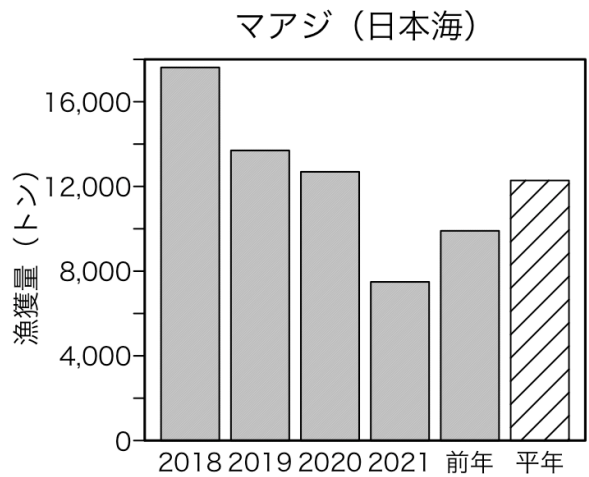
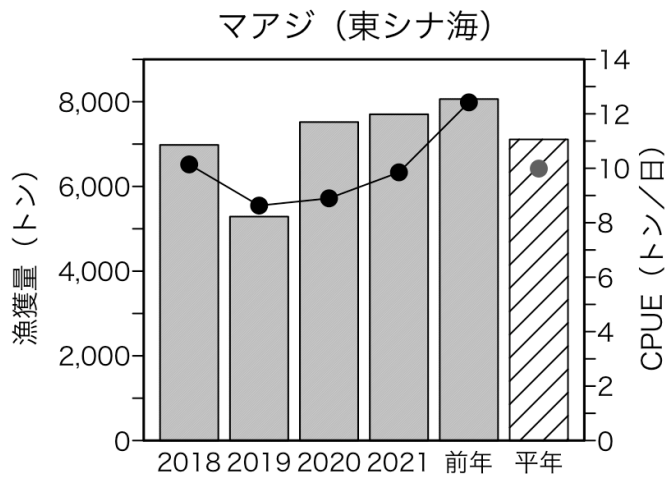
山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。

表2. 日本海における沿岸域の漁況経過（2022年11月～2023年1月）

	マアジ	マサバ	マイワシ
島根	漁獲量は184トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比174%、平年比68%）。	漁獲量は120トンで、前年・平年を下回った（前年比49%、平年比32%）。	漁獲量は0.2トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比1,052%、平年比12%）。
鳥取	漁獲量は1,809トンで、前年・平年並みであった（前年比91%、平年比113%）。	漁獲量は9,330トンで、前年・平年を上回った（前年比276%、平年比150%）。	漁獲量は21トンで、前年・平年を下回った（前年比5%、平年比3%）。
兵庫	漁獲量は13トンで、前年・平年を下回った（前年比32%、平年比51%）。	漁獲量は1トンで、前年・平年を下回った（前年比14%、平年比29%）。	漁獲量は0.002トンで、前年・平年を下回った（前年比0.04%、平年比0.15%）。
京都	漁獲量は133トンで、前年・平年を上回った（前年比121%、平年比124%）。	漁獲量は106トンで、前年・平年を上回った（前年比205%、平年比307%）。	漁獲量は0.06トンで、前年・平年を下回った（前年比0.9%、平年比4.4%）。
福井	前年を上回り、平年並みであった（前年比130%、平年比119%）。	前年を下回り、平年を上回った（前年比60%、平年比155%）。	漁獲はなかった。
石川	前年・平年を下回った（前年比61%、平年比68%）。	前年を上回り、平年並みであった（前年比144%、平年比83%）。	前年・平年を下回った（前年比3%、平年比2%）。
富山	漁獲量は626トンで、前年・平年を上回った（前年比168%、平年比182%）。	漁獲量は664トンで、前年・平年を上回った（前年比284%、平年比176%）。	漁獲量は0.9トンで、前年・平年を下回った（前年比79%、平年比19%）。
新潟	前年・平年を下回った（前年比55%、平年比56%）。	前年・平年を下回った（前年比51%、平年比50%）。	前年・平年を下回った（前年比4%、平年比4%）。
山形	漁獲量は11トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比46%、平年比96%）。	漁獲量は3トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比398%、平年比118%）。	漁獲はなかった。
秋田	前年を下回り、平年並みであった（前年比47%、平年比80%）。	前年・平年を上回った（前年比178%、平年比154%）。	前年・平年を下回った（前年比25%、平年比73%）。
青森	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は36トンで、前年・平年を下回った（前年比50%、平年比55%）。	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は114トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比60%、平年比86%）。	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は193トンで、前年・平年を下回った（前年比73%、平年比75%）。

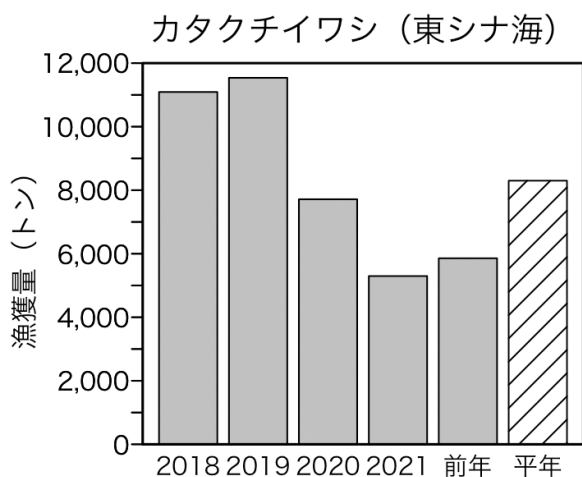
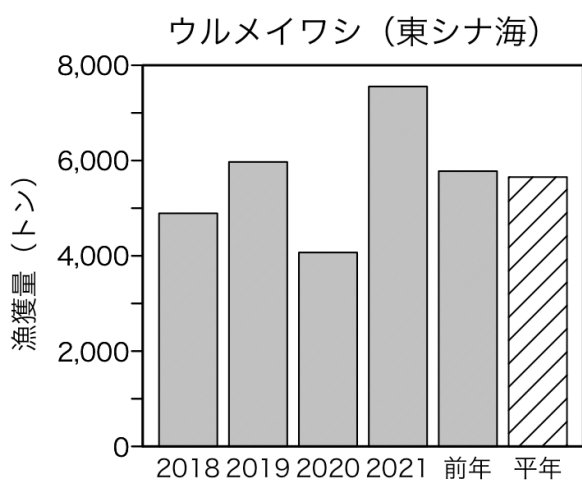
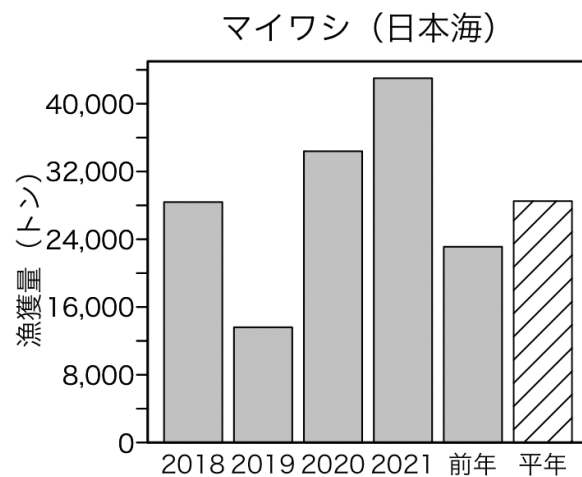
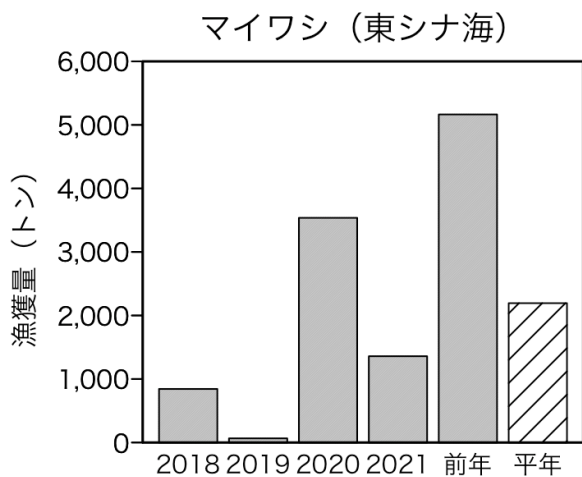
注：「前年」は2022年11月～2023年1月、「平年」は過去5年の平均値。

日本海において水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。



今後の見通し参考図（マアジ、さば類）

沿岸漁業の漁獲量（沿岸漁況の指標の一つ；棒グラフ）と大中型まき網漁業の1日当たりの漁獲量（沖合漁況の指標の一つ；折れ線グラフ、CPUE）。東シナ海沿岸漁業の漁獲量は、鹿児島県～山口県の主要沿岸漁業漁獲量。ただし、マサバは福岡県、鹿児島県（枕崎港・阿久根港）のマサバ漁獲量とその他の県のさば類漁獲量（ゴマサバを含むが主にマサバ）の合計値。ゴマサバは福岡県と鹿児島県（枕崎港・阿久根港）のゴマサバ漁獲量の合計値。日本海沿岸漁業の漁獲量は、島根県～青森県の主要漁業（大中型まき網漁業を含む）の漁獲量。4月～9月。平年は過去5年平均。



今後の見通し参考図（いわし類）

沿岸漁業の漁獲量。東シナ海沿岸漁業の漁獲量は、山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。日本海沿岸漁業の漁獲量は、島根県～青森県の主要漁業（大中型まき網漁業を含む）の漁獲量。4月～9月。平年は過去5年平均。

参 画 機 関

地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	鳥取県水産試験場
秋田県水産振興センター	島根県水産技術センター
山形県水産研究所	山口県水産研究センター
新潟県水産海洋研究所	福岡県水産海洋技術センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	佐賀県玄海水産振興センター
石川県水産総合センター	長崎県総合水産試験場
福井県水産試験場	熊本県水産研究センター
京都府農林水産技術センター 海洋センター	鹿児島県水産技術開発センター
兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター	沖縄県水産海洋技術センター
	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所